

# 接続助詞「～ながら」について

——「～ても」と比較して——

陳 芬 慧\*

キーワード: 逆接, 「～ながら」, 「～ても」, 同時性, 不相応性

## 要 旨

数多くの逆接を表す接続助詞について、従来専ら対比されてきたのは、「～けれども」と「～のに」、「～のに」と「～ても」、「～ても」と「～たって」などである。しかし、「～ながら」と「～ても」が共に逆接の意味を表す場合はあるけれども、両者の意味上の類似点と相違点を詳しく対比した研究は見当たらない。一方、二つの形式の意味・用法は完全に同一ではなく、それぞれ独自の特徴をも持つ。本稿は「～ても」との比較の視点から、接続助詞「～ながら」の意味・用法を分析・考察し、両者がどのように使い分けられているのか、また置き換えられるとしてもニュアンスがどう異なるのか、という問題を中心に分析を進めていき、これらの問題を解決することを目的とする。

## 1. はじめに

従来、「逆説」「逆接」「逆態」などの名称で研究の対象とされてきた逆接表現には、「～けれども」「～が」「～のに」「～ながら」「～ても」「～たって」などがある。その中の「～ながら」は動作・作用の同時性を表す用法と不相応性を表す用法を共に持つ。この「不相応性」というのは、前句の事柄と後句で述べられる事柄とは、一般的に考えれば、両者が共に成立するのはふさわしくない、つり合わないという意味である。「～ても」は、「逆接」以外の用法も持ち、また仮定的用法と事実的用法を共に持つ。ここで扱う二形式「～ながら」「～ても」は共通する意味を表す場合がある。一方、二つの形式にはそれぞれ独自の特徴もある。本稿は、接続助詞「～ながら」「～ても」がどのような条件によって使い分けられているのか、また置き換えられるとしてもニュアンスがどう異なるのか、という問題を解決することを目的とする。

さて、類似の意味・用法を持つ言語形式が複数存在する場合があるが、それらの意味・用法は

---

\* CHEN Fen Hui: 名古屋大学大学院文学研究科日本語文化専攻博士後期課程3年。

完全に同一ではない。逆接を表す接続形式「～ながら」「～ても」についても、次の例文のように、言い換えが可能な場合もあれば、不可能な場合もある。

- (1) a. あの人は知っていながら、教えてくれなかった。  
 (1) b. あの人は知っていても、教えてくれなかった。  
 (2) a. \*たとえ彼は事実を知っていながら、教えてくれないと思う。  
 (2) b. たとえ彼は事実を知っていても、教えてくれないと思う。

## 2. 従来の説明の検討

逆接を表す複文は、小泉(1987)の「論理文」による研究や、言語学研究会(1986)、仁田(1987)によって体系化され、順接の条件文や原因文・理由文との関係から分析することが示され、また逆接の意味が規定された。

個々の形式が表す意味について、従来専ら対比されてきたのは、「～けれども」と「～のに」、  
「～のに」と「～ても」、「～ても」と「～たって」である。しかし、例文(3)のように、「～ながら」と「～ても」が共に逆接の意味を表す場合はあるけれども、両者の意味上の類似点と相違点を詳しく対比した研究は見当たらない。

- (3) a. 日本は今、世界で最も発展している国の一つでありながら、伝統文化が依然として失われていないことに、私は驚いています。(『広報なごや』第3版 平成10年2月号)  
 (3) b. 日本は今、世界で最も発展している国の一つであっても、伝統文化が依然として失われていないことに、私は驚いています。

また従来の説明、例えば国立国語研究所(1951)は「～ながら」について次のように説明している:

- ① ある動作・作用が継続されると同時に他の動作・作用が平行して行われる事態における両動作を接続する。(1951: 128)  
 ② 二つの事がらが相応しない事態の表現における両者の接続。(1951: 129)  
 ①と②はそれぞれ南(1974)の従属句の分類の「Aの類」の「～ながら(継続)」と「Bの類」の「～ながら(逆接)」にあたる<sup>1</sup>。これによると、例文(4)(5)は不相応性を表す②の例文として挙げることができる。

- (4) その結果「犬が飼いたいよう、馬が飼いたいよう」と言いながら、猫すらも飼えぬ東京のアパートメントに暮らしている。(『普通の生活』p. 81)

<sup>1</sup> 南(1974: 114-131)は従属句の種類を3種類に分ける。「Aの類」は「～ながら(継続)」「～つつ」など、「Bの類」は「～ながら(逆接)」「～ので」「～たら」「～ても」など、「Cの類」は「～が」「～から」「～けれど」などである。

(5) ゆっくりとお茶を飲みながら, 心はいつときも早くその場から逃れようと焦っていた。

(『ガラスの階段』p. 23)

しかし、例文(4)(5)の前件「言う」「ゆっくりとお茶を飲む」と後件「暮らしている」「焦っている」は②の「二つの事がらが相応しない事態の表現における両者の接続」という意味のみではなく、①の「ある動作・作用が継続されると同時に他の動作・作用が平行して行われる事態における両動作を接続する」という意味も含んでいるので、従来の説明は不十分であると思われる。

さらに例文(6)のように、「～ながらも」と「～ながら」がどう違うのかという問題についてもさらに検討する必要があると思われる。

(6)a. 徹郎が、非難がましい目で自分を見ているのを感じながらも, キャシーはそう言い放った。

(『遠い海から来た CŌO』p. 231)

(6)b. 徹郎が、非難がましい目で自分を見ているのを感じながら, キャシーはそう言い放った。

このように、接続助詞としての「～ながら」についてはまだ問題点が残されていることがわかる。次節で「～ながら」を検討していくことにする。

### 3. 「～ながら」について

国立国語研究所(1951)によると、接続助詞としての「～ながら」は①ある動作・作用が継続されると同時に他の動作・作用が平行して行われる事態における両動作を接続する、②二つの事がらが相応しない事態の表現における両者の接続、の二つの用法がある。本稿ではこの分類に従い、接続助詞「～ながら」の用法を分析する。しかしその①の同時性と②の不相応性を両方含んでいる場合も考えられるので、二つの動作・作用が単に同時に行われることを表す「～ながら」を同時性だけの「～ながら」、二つの事柄が同時に成立し、その二つの事柄が相応しない事態を表す「～ながら」を同時性と不相応性の両方を表す「～ながら」、単に二つの事柄が相応しない事態を表す「～ながら」を不相応性だけの「～ながら」と呼ぶことにする。また逆接を表現する「～ても」と対比するため、そのうちの②の部分を中心に考察することにする。

#### 3-1. 同時性だけの「～ながら」

順接的で、前句と後句が同時に進行していることを示すため、「同時性」が生じてくる。性質が異なる動作を同時に行っていることを表すため、動詞のみに付く。同時性だけの「～ながら」は、瞬間的な動詞に付かないという制限がある。瞬間的な動詞は、継続的な同時進行を表す「～ながら」の意味と性質が矛盾するため、共用できない。次の例文は非文である。

(7) \*子犬を見つけながら、歩き続けた。

- (8) \*今朝学校に行きながら、本を読んだ。  
 (9) \*彼は死にながら「天皇陛下万歳!」と叫んだ。  
 (10) \*煙草を買いながら、ポケットからライターを出した。

しかし、同じ動詞「行く」でも、「学校に通う」という意味を表す「学校に行く」の場合だと、毎日(日々が重なって)「学校に行く」という動作を繰り返して行う意味になる。この場合の「行く」は性質上瞬間的な動詞から離れ、継続性(学校に通う期間)のある動詞と見なしてよいと考えられる。

- (11) 彼は学校に行きながら、工場で働いていた。

### 3-2. 同時性と不相応性の両方を表す「～ながら」

同時性と不相応性の両方を表す「～ながら」は二つの事柄が同時に成立し、その二つの事柄が相応しない事態を表すという用法である。動詞以外、形容詞、形容動詞、体言などにも付く。

- (12) 海外で活躍できる「人材」が必要だといながら、そうした人材が自然に育つのを待つのでは、とてもではないが間に合わない。(『世界が見える日本が見える』p. 202)  
 (13) 彼の車は小さいながら乗り心地は快適だ。  
 (14) あのレストランは低額ながらおいしい料理が揃っている。  
 (15) 彼女は小学生ながら、大人顔負けの演技をする。

### 3-3. 不相応性だけの「～ながら」

二つの動作の同時性を表す「～ながら」と違い、継続性のない瞬間的な動詞と共用することができ、不相応性のみを表す。

- (16) 昨日太郎は学校に行きながら、授業には出なかった。  
 (17) 彼はすでに死にながら、僕たちの心の中では生き続けている。  
 (18) 電車が一時間も遅れながら、私は何とか面接の時間に間に合うことができた。

### 3-4. 同時性と不相応性の両方を表す「～ながら」が付く品詞

同時性と不相応性の両方を表す「～ながら」は動詞(瞬間的な動詞を除く)、形容詞、形容動詞、体言などに付く。前後二つの事柄が相応しない事態のみを表すのではなく、「同時性」をも意味する。

- (19) ゆっくりとお茶を飲みながら、心はいっときも早くその場から逃れようと焦っていた。  
 (=5) (『ガラスの階段』p. 23)  
 (20) このエア・ターミナルは、横浜駅から十分程歩いたところ、つまり、横浜駅の目と鼻の先でありながら、横浜駅ではないという妙な場所にある。

(『世界が見える日本が見える』 p. 105)

- (21) 清水選手は身長が低いながら、見事に金メダルを取った。  
 (22) 彼の動作は緩慢ながら誤りは一つもない。  
 (23) 排気量は最小ながら軽量を利してメッサーシュミットがまずトップをとり、セカンドでスバルがそれに追いつく。  
 (『普通の生活』 p. 154)

以上の例文のように「～ながら」は「ゆっくりとお茶を飲む」「横浜駅の目と鼻の先である」「身長が低い」「緩慢」「排気量が最小」とそれぞれの相応しない事態「焦っている」「横浜駅ではない」「金メダルを取る」「誤りは一つもない」「トップをとる」を結び付けるのみではなく、前後の二つの事柄が同時に成立している事態をも表している。つまり、「～ながら」によって表現される従属句は動作・作用、状態が継続され、他の動作・作用、状態も成立しているということで、「同時性」が生じる。また前後二つの事柄が一般的にはつり合わない・相入れない事態なので、「不相応性」が生じる。

しかし、瞬間的な動詞ではなくても、「～ながら」節は主節より先に起ったひとまとまりの動作の場合、「同時性と不相応性の両方ではなく、「不相応性だけ」を表す。動詞の種類ではなく、文脈によって「同時性と不相応性の両方を表す」のか、「不相応性だけを表す」のかが決定される場合がある。(24)の「言う」は瞬間的な動詞ではないが、この場合の「～ながら」は不相応性だけの「～ながら」である。

- (24) 「必ず出席する」と言いながら、彼は来なかった。

### 3-5. 不相応性だけの「～ながら」が付く品詞

不相応性だけを表す「～ながら」は瞬間的な動詞に付く。この場合の「～ながら」は、前後の二つの事柄が一般的には共に成立しない事態を表す(つり合わない・相入れない事柄が共存することを表す)。二つの事柄が相応しない事態における表現なので、継続性のない瞬間的な動詞でも「～ながら」の形式で表現することができる。次に例文を示す。

- (25) とみは、友子が異常な事故に遭いながら、比較的落ち着いていることに疑いを抱いていなかった。  
 (『ガラスの階段』 p. 54)  
 (26) 二発目のストロボを浴びたとき、自分も視力を失いながら反射的に少尉にとびついたクヴィヨン曹長が彼の体を押し倒していなければ、パジュリ少尉は確実に失明していただろう。  
 (『遠い海から来た COO』 p. 246)

### 3-6. 不相応性の判断の基準

前後の二つの事柄が相応しない事態における「不相応性」は何故生じてくるかということについて、次の二つの文を比較してみよう。

(27) 太郎は高校生でありながら、こんな本も読めない。

(28) 太郎は高校生でありながら、こんな本も読める。

以上の二つの文とも逆接表現である。同じ逆接表現の文であるが、後にある主文が違うのは何故かという問題は、「裏にある常識的な判断」と関係している。例文(27)において、前件にある「高校生」という事柄が成立する状況を根拠とし、「こんな本が読める」という事柄は相応であると判断される。しかし、実際は反する「こんな本も読めない」という不相応な事柄が後件にある。前件にある事柄と後件にある事柄との間の不相応性が生じるのは話し手自身の個人判断によるところが大きい。厳密に言えば、「相応であるか」「不相応であるか」を判断する基準には話し手が所属する集団の「常識」が含まれる。それゆえ、特定の価値観を共有する人々の間では「前件」に相応する事柄の予測は可能である。例文(27)は「高校生である」と「こんな本も読めない」が両立しない関係になっているという判断に基づいている。例文(28)は「高校生である」と「こんな本も読める」が両立しない関係になっているという判断に基づいている。つまり、「高校生である」と「こんな本も読めない」とは相応しない事態であるか、「高校生である」と「こんな本も読める」とは相応しない事態であるかどうかを前提とするかによって主文が変わってくると思われる。

### 3-7. 「～ながら」と「～ながらも」の相違点

続いて「～ながら」と「～ながらも」によって表される文を考察することにする。

(29) a. ……花岡は遠く離れた関西の地で結核に臥す寺井のことを心に描きながらも、もうどうにでもなれという思いに突っ走っていく。 (『星々の悲しみ』 p. 202)

(30) a. その巨大な生物は、荒れ狂う波浪に翻弄されながらも、確かにひとつの意志を持って自らの体のある水域へ運ぼうとしていた。 (『遠い海から来た COO』 p. 3)

(31) a. 奇妙なことに、恐怖におののきながらも僕は、その、霊とおぼしき存在の生前の人柄を考えていた。 (『普通の生活』 p. 224)

(32) a. 原文の英語版の中の、主人公イチローと一世である両親との日本語による会話が、日本語版の中でも日本語で交されているあたりに(それは当然のことなのだが)、奇異な感じをうけながらも、読み切り、日系二世にとっては、英語が母国語なのだという、今さらながらの感想と認識を噛みしめたものである。 (『普通の生活』 p. 130)

以上の文の中で、各々の「～ながらも」を「～ながら、それでも」で言い換えると、各々の a 文とほぼ同義に解釈できるようになる。「～ながら、それでも」の「～ながら」は同時性を表す「～ながら」であり、接続詞「それでも」が逆接を表す。

(29) b. ……花岡は遠く離れた関西の地で結核に臥す寺井のことを心に描きながら、それでももうどうにでもなれという思いに突っ走っていく。

(30) b. その巨大な生物は、荒れ狂う波浪に翻弄されながら、それでも確かにひとつの意志を持って自らの体のある水域へ運ぼうとしていた。

(31) b. 奇妙なことに、恐怖におののきながら、それでも僕は、その、霊とおぼしき存在の生前の人柄を考えていた。

(32) b. 原文の英語版の中の、主人公イチローと一世である両親との日本語による会話が、日本語版の中でも日本語で交されているあたりに(それは当然のことなのだが)、奇異な感じをうけながら、それでも読み切り、日系二世にとっては、英語が母国語なのだという、今さらながらの感想と認識を噛みしめたものである。

実際この「～ながら、それでも」の形式によって表される実例もある。

(33) ……掌の内側に汗が吹き出してくるのを感じながら、それでも平静を装って、そう答えた。  
(『遠い海から来た CŌO』 p. 123)

「～ながら」は主文と従文の事柄の不相応性を表す働きがあるが、「～ながらも」は「～ながら」より、前後の事柄の反意性・対立性が強い場合に使われるように思われる。「～ながら」は「同時性だけ」と「同時性と不相応性の両方」を表すので、「も」をつけることによって不相応性が強められる。簡単に言えば、「～ながら、それでも」というような逆接を強調するということになると考えられる。「～ながらも」は構成上「ながら」+「も」であり、その「も」は定延(1995)の「意外のも」<sup>2</sup> であると考えられる。続いて次の二つの文を見てみよう。

(34) a. 洋助は半分照れながらも、冷静さを保つ努力をしながら父親に答えた。

(『遠い海から来た CŌO』 p. 89)

(34) b. ??洋助は半分照れながら、冷静さを保つ努力をしながら父親に答えた。

例文(34 a)の「～ながらも」はもちろん逆接表現であるが、「～ながら」も不相応性を表すことができるので、「～ながらも」を「～ながら」に入れ換えてもほぼ同じ意味になるはずである。しかし、例文が示すように、「～ながら」に換えると、不自然な文になる。

なお、例文(34 a)の「半分照れながらも」は「冷静さを保つ努力をしながら」より、「父親に答えた」との連結性が弱いという現象が見られる。これについては現在考察中である。

<sup>2</sup> 定延(1995)は外界から得た情報を心内で体系化して外界の動向を予測し、これに対処していく人間の一連の心的プロセスに注目することによって、助詞「も」の内部構成を考察する。「も」に多義性が生じる原因は人間の心的プロセスに求められる。つまり心的プロセスと対応する形で行った「も」の用法分類が、「も」の様々な言語的振る舞いを説明するのに有効である、と主張している。その中で、事態実現可能性の押し量りという心的プロセスの方向に沿って「意外のも」という「も」がある。「意外のも」はどんな「も」であるかという、例えばある試験を大学生・高校生・中学生の3名が受験するという場合、我々は3名の合格可能性を押し量って比較し、比較結果を心内に安定させることができる。仮に比較結果を、大学生の合格可能性が最も高く、中学生が最も低いとしておく。さて、合格発表があり、皆合格であったという場合、「中学生も合格だ」等と「も」を使って表現し、大学生や高校生も同様であることを間接的に表現できる。こうした間接的表現は、言表事態(中学生の合格)と類似事態(大学生・高校生の合格)の実現可能性の高低差に基づく含意関係(言表事態が実現すれば類似事態も実現する)があって始めて可能となる。このような「も」を「意外のも」と呼ぶ。

### 3-8. 「～ながら」と「～ていながら」の相違点

不相応性を表現する場合に、動詞に付く「～ながら」と「～ていながら」は次のような相違点がある。「～ていながら」の形式をとる場合も、「～ながら」の形式をとる場合も両者共に前後の事柄が相応しない事態を表すが、「～ながら」より、「～ていながら」は動詞を状態化しているので、主に逆接を表す。「～ていながら」は状態の同時性を表し、「～ながら」は動作・作用の同時性を表していると考えられる。

(35) 個の確立なしに装いだけ近代国家になってしまったため、人々は都市に住んでいながら、封建時代の村民と同じ行動様式をとる、ということがまあります。

(『ちょっとおかしいぞ、日本人』 p. 39)

(36) 昼間、寝ていながら、あなたのことを考えることがあります。(『紅花』 p. 108)

(37) が、佐久二は押し黙っていながら、これはまずいことになったと思った。

(『紅花』 p. 188)

(38) その三木の口振りからすると、三木は早く起きていながら、電話をかけて寄越すのを慮していたらしかった。(『紅花』 p. 280)

(39) 亜津子と関係を持っていながら、亜津子との関係を切ろうとしているのではないか。

(『紅花』 p. 405)

(40) そういう恥ずべき状況に自分を置いていながら、今日の日本にはほとんどそうした認識がない。(『世界が見える日本が見える』 p. 9)

## 4. 「～ながら」と「～ても」の類似点と相違点

### 4-1. 「～ながら」と「～ても」の類似点

「～ても」と同様、「～ながら」も前句の事柄の予想に反することを、後句で述べることを表現できる。両者とも逆接表現の用法がある。逆接を表す「～ながら」と「～ても」のそれぞれが付く品詞別から、両者を比較してみる。

#### 4-1-1. 動詞(瞬間的な動詞を除く)

動詞に付く「～ながら」と動詞に付く「～ても」は両方とも逆接を表現できる。次の例文(41)(42)を見てみよう。

(41) a. ……うっかり病気にでもなったらことだと思い、いやな不安を抱きながら病院にも行かず、トローチを舐めたり煙草を減らしてみたりしてその年を過ごしたのだった。

(『星々の悲しみ』 p. 99)

(41) b. ……うっかり病気にでもなったらことだと思ひ、いやな不安を抱いても病院にも行かず、トローチを舐めたり煙草を減らしてみたりしてその年を過ごしたのだった。

(42) a. 何ということだ。僕は口では海の汚染を嘆きながら、今まで自分の思慮の浅さ故に海の汚染に一役かって、魚たちを殺し続けてきていたのだ。 (『普通の生活』p. 81)

(42) b. 何ということだ。僕は口では海の汚染を嘆いても、今まで自分の思慮の浅さ故に海の汚染に一役かって、魚たちを殺し続けてきていたのだ。

以上の例文において、「～ながら」の形式をとる場合と「～ても」の形式をとる場合は両方とも逆接を表現するが、それぞれの b の「～ても」文は「後件を引き起こす最も実現可能性の低い条件における」という表現であるが、a の「～ながら」文は「動作・作用が継続される事態における」という表現である。例文 (41 a) (42 a) は動作「いやな不安を抱く」「海の汚染を嘆く」が継続されると同時に、動作「病院にも行かず、トローチを舐めたり煙草を減らしてみたりしてその年を過ごす」「魚たちを殺し続けてきている」も行われているという意味である。(41 b) (42 b) の「～ても」文は動作「いやな不安を抱く」「海の汚染を嘆く」と内容上衝突する後件を引き起こすという意味である。b の「いやな不安を抱いても」「海の汚染を嘆いても」は a の「いやな不安を抱きながら」「海の汚染を嘆きながら」より、動作が一回的で時間が短く、動作の継続性がない(動作の反復がない)と感ぜられる。続いて次の例文 c を見る。

(41) c. ……うっかり病気にでもなったらことだと思ひ、いやな不安を抱いていても病院にも行かず、トローチを舐めたり煙草を減らしてみたりしてその年を過ごしたのだった。

(42) c. 何ということだ。僕は口では海の汚染を嘆いていても、今まで自分の思慮の浅さ故に海の汚染に一役かって、魚たちを殺し続けてきていたのだ。

例文 b より、例文 c の方が意味上例文 a の「～ながら」に近いと感ぜられる。その理由は、例文 b の中の「抱いても」「嘆いても」は「抱く」「嘆く」という条件においても、という意味である。「抱く状態にいても」「嘆く状態にいても」、という意味を表す「抱いていても」「嘆いていても」は動作の継続性を持ち、より「抱きながら」「嘆きながら」に近いと考えられる。以上のことから、逆接表現において、動詞(瞬間的な動詞を除く)に付く「～ながら」は「～ても」に置き換えることができると言えよう。

#### 4-1-2. 瞬間的な動詞

瞬間的な動詞に付く「～ながら」と瞬間的な動詞に付く「～ても」は両方とも逆接を表現できる。この場合、「～ながら」は継続性のない動詞に付くので、二つの事柄が相応しない事態のみを表す。「～ても」に置き換えることができる。

(43) a. 昨日太郎は学校に行きながら、授業には出なかった。(=16)

(43) b. 昨日太郎は学校に行っても、授業には出なかった。

- (44) a. とみは、友子が異常な事故に遭いながら、比較的落ち着いていることに疑いを抱いていなかった。(=(25)) (『ガラスの階段』p. 54)
- (44) b. とみは、友子が異常な事故に遭っても、比較的落ち着いていることに疑いを抱いていなかった。
- (45) a. 二発目のストロボを浴びたとき、自分も視力を失いながら反射的に少尉にとびついたクヴィヨン曹長が彼の体を押し倒していなければ、パジュリ少尉は確実に失明していただろう。(=(26)) (『遠い海から来た<sup>ク</sup>COO』p. 246)
- (45) b. 二発目のストロボを浴びたとき、自分も視力を失っても反射的に少尉にとびついたクヴィヨン曹長が彼の体を押し倒していなければ、パジュリ少尉は確実に失明していただろう。

#### 4-1-3. 形容詞、形容動詞、体言

「～ても」と同様、形容詞、形容動詞、体言などに付く「～ながら」も前句の事柄に反することが、後句で述べられることを示すことができる。次の例文を見てみよう。

- (46) a. 清水選手は身長が低いながら、見事に金メダルを取った。(=(21))
- (46) b. 清水選手は身長が低くても、見事に金メダルを取りました。
- (47) a. 彼の動作は緩慢ながら誤りは一つもない。(=(22))
- (47) b. 彼の動作は緩慢でも誤りは一つもない。
- (48) a. 彼はお金持ちながら質素な生活をしている。
- (48) b. 彼はお金持ちでも質素な生活をしている。

#### 4-2. 「～ながら」と「～ても」の相違点

「～ながら」と「～ても」の間に、次のような相違点がある。逆接表現の「～ても」によって表される文の中で、取り上げられた条件は後件にある「帰結」を引き起こす最も実現可能性の低い条件である。

- (49) a. トウホクさんは、そんな重症患者でありながら、同病の誰からも庇ってもらえなかった。(『星々の悲しみ』p. 215)
- (49) b. トウホクさんは、そんな重症患者であっても、同病の誰からも庇ってもらえなかった。

例文(49 b)で取り上げられた条件「重症患者である」は、その帰結「庇ってもらえない」を引き起こす可能性の最も低い、また通常なら帰結「庇ってもらえない」を成立させない条件である。それにもかかわらず、条件・状況「重症患者である」はその後件の帰結「庇ってもらえない」を引き起こす。このように、例文(49 b)は「重症患者であれば庇ってもらえる」を「裏にある常識

的な条件」としている。条件「重症患者である」は帰結「庇ってもらえない」を実現させる可能性の最も低い条件であるため、逆接の意味が生じてくる。それに対して、「～ながら」によって表現される文の中で、前句にある事柄は副次的であるが、後句にあるのは主である。「～ながら」によって、接続される(結び付けられる)二つの事柄は同時に成立して、その上相応しない関係と位置付けられるのである。(49 a)は、「重症患者である」という事柄と「庇ってもらえない」という事柄は同時に成立し、そして「重症患者である」と「庇ってもらえない」二つの事柄は相応しないという事態を表している。

「～ながら」「～ても」によって表される文はもう一つ大きな違いがある。「～ても」は最も実現可能性の低い条件を取り上げ、「意外のもの」の働きによって、その取り上げられた最も実現可能性の低い条件以外にも、後件と内容上衝突する他の要因が存在することを暗示する。それに対し、「～ながら」は単にある事柄を取り上げ、その取り上げられた事柄が後件にある別の事柄とは相応しない事態を表現する。

(50) a. 何ということだ。僕は口では海の汚染を嘆きながら、今まで自分の思慮の浅さ故に海の汚染に一役かって、魚たちを殺し続けてきていたのだ。(=(42 a))

(『普通の生活』p. 81)

(50) c. 何ということだ。僕は口では海の汚染を嘆いていても、今まで自分の思慮の浅さ故に海の汚染に一役かって、魚たちを殺し続けてきていたのだ。(=(42 c))

例文(50 c)は「口で海の汚染を嘆いていれば、魚たちを殺し続けてこない」を「裏にある常識的な条件」とし、条件「口で海の汚染を嘆いている」は帰結「魚たちを殺し続けてきている」を引き起こす最も可能性の低い条件という意味である。その帰結「魚たちを殺し続けてきている」を引き起こす条件「口で海の汚染を嘆いている」以外、ほかにも帰結「魚たちを殺し続けてきている」と内容上衝突する条件、例えば「心の中で海の汚染を嘆いている」などが存在することを暗示している。

## 5. おわりに

接続助詞に関する先行研究は多いが、「～ながら」を対象としたものは少ない。また本稿第二節の検討でわかったように、「～ながら」と「～ても」は共に逆接を表すことができるけれども、両者の意味上の類似点と相違点を詳しく対比した研究は見当たらない。

そこで本稿では、「～ても」との比較の視点から、「～ながら」の意味・用法を分析・考察し、両者がどのように使い分けられているかを明らかにすることを試みた。ここで改めて考察した結果、明らかになったことを簡単にまとめておく。

接続助詞としての「～ながら」は順接的で動詞に付く「同時性だけ」と逆接的で、前句の事柄

の予想に反することが、後句で同時に述べられることを示す「同時性と不相応性」と前後の二つの事柄が相応しない事態を示す「不相応性だけ」を表すことができる。「同時性だけ」を表す「～ながら」は性質が異なる動作を同時に行っていることを表すため、動詞のみに付く。順接的で、前句と後句が同時に進行していることを示すため、「同時性」が生じてくる。

それに対し、「同時性と不相応性」の両方を表す「～ながら」は二つの相応しない事柄が同時に成立している事態を表すという用法である。そのため、動詞のみでなく、形容詞、形容動詞、体言などにも付く。継続性のない瞬間的な動詞に付く「～ながら」は、二つの動作の同時性を表せず、ふさわしくない事態の「不相応性だけ」を表すことができる。

前後の二つの事柄は相応する事態であるか、相応しない事態であるかという基準は、「裏にある常識的な判断」に関係している。「～ながらも」は「～ながら」より逆接を強調する用法で、構成上は「ながら」+「も」であり、その「も」は定延(1995)の「意外のも」である。

「～ても」と同様、「～ながら」も前句の事柄の推論に反することが、後で述べられることを表現することができる。両者とも逆接表現の用法がある。

一方、「～ながら」と「～ても」の間に、次のような相違点がある。逆接表現の「～ても」によって表される文の中で、取り上げられた要素は後件にある「帰結」を引き起こす最も実現可能性の低い条件である。それに対して、「～ながら」によって接続される(結び付けられる)二つの事柄は相応しない関係と位置付けられるのである。

また、「～ながら」「～ても」によって表される文はもう一つ大きな違いがある。「～ても」は最も実現可能性の低い条件を取り上げて、その取り上げられた条件はともかく、それ以外にも、後件と内容上衝突するほかの要因が存在することを暗示する。それに対し、「～ながら」は単にある事柄を取り上げ、その取り上げられた事柄が後件にある別の事柄とは相応しない事態を意味する。

#### 参 考 文 献

- 言語学研究会・構文論グループ(1986)「条件づけを表現するつきそい・あわせ文(四)」『教育国語』84, pp. 49-68, むぎ書房。
- 小泉 保(1987)「談歩文について」『言語研究』91, pp. 1-14.
- 国立国語研究所(1951)『現代語の助詞・助動詞一用法と実例一』, 秀英出版。
- 坂原 茂(1985)『日常言語の推論』, 東京大学出版会。
- 定延利之(1995)「心的プロセスからみた取り立て詞モ・デモ」『日本語の主題と取り立て』, pp. 227-60, くろしお出版。
- 鈴木一彦・林 巨樹(1985)『研究資料日本文法⑦ 助辞編(三)助詞・助動詞辞典』, 明治書院。
- 鈴木 忍(1978)『教師用ハンドブック③ 文法I 助詞の諸問題1』, 国際交流基金。
- 陳 芬慧(1997)「「～ても」「～たって」「～たところで」について一逆接表現を中心に一」, 名古屋大学大

学院文学研究科 未公刊 修士論文.

富田隆行(1997) 『統・基礎表現 50 とその教え方』, 凡人社.

生田目弥寿(1996) 『現代日本語表現文典』, 凡人社.

仁田義雄(1987) 「条件づけとその周辺」『日本語学』6巻9号, pp. 13-27, 明治書院.

前田直子(1995) 「ケレドモ・ガとノニとテモ逆接を表す接続形式一」『日本語類義表現の文法(下)複文・連文編』, pp. 496-505, くろしお出版.

益岡隆志・田窪行則(1992) 『基礎日本語文法一改訂版』, くろしお出版.

南不二男(1974) 『現代日本語の構造』, 大修館書店.

———(1993) 『現代日本語文法の輪郭』, 大修館書店.

森田良行・松木正恵(1989) 『日本語表現文型』, アルク.

#### 用例出典

『紅花』 井上 靖(1980), 文春文庫.

『世界が見える日本が見える』 大前研一(1989), 講談社文庫.

『普通の生活』 景山民夫(1988), 角川文庫.

『遠い海から来た COO』 景山民夫(1992), 角川文庫.

『ちょっとおかしいぞ, 日本人』 千葉敦子(1988), 新潮文庫.

『ガラスの階段』 津村節子(1984), 文春文庫.

『星々の悲しみ』 宮本 輝(1984), 文春文庫.

『広報なごや』 1998年2月号.